

2 つの西部劇とアメリカのイラク攻撃

内 野 信 幸

お尋ね者ポスターとブッシュ大統領

9.11 の事件後にテレビのニュースに現れたブッシュ大統領が、ニューヨークの世界貿易センタービルを破壊した犯人のお尋ね者ポスターをかざして怒りを露わにした。そのお尋ね者とはビンラディンのことだった。大統領は西部劇の保安官気取りのように思えた。この時、自国の 1970 年に公開された 2 つの西部劇映画をブッシュは見たことがないのではないかと思えた。その後、ビンラディンの「盟友」であり、大量破壊兵器や細菌爆弾をもつという疑いで、フセイン大統領とイラクへの攻撃が開始された時、この映画が訴えていたことへの思いをいっそう強くした。その映画とは、『ソルジャー・ブルー』と『小さな巨人』。ともに 1970 年に公開された。この 2 つの映画はアメリカニューシネマと呼ばれる映画の中に位置づけられるものだ。若かりし時に西部劇ファンであった筆者にとっても、大きな衝撃を与えた映画であった。というのは、インディアン＝野蛮、白人＝文明人という、それまでの西部劇の図式を根底から変えるものだったからだ。劇場公開もあったし、日本のテレビ民放局もかつて取り上げたものだ。

『ソルジャー・ブルー』とは

監督はラルフ・ネルソン、主演は、シャイアン族の村で育った白人娘クレスタにキャンディス・バーゲン、インディアンとかつて呼ばれ——差別表現是正で現在ではネイティヴアメリカンと言われる——アメリカ先住民に父を殺され、復讐に燃える騎兵隊員ホーナスにピーター・ストラウス。騎兵隊員が着る軍服がブルーということから、映画の標題に用いられている。

シャイアン族「討伐」を行なおうと計画している第 11 騎兵隊の所属の軍曹との結婚が親に勝手決められたクレスタを連れてホーナスとクレスタは部隊の駐屯地へと向かう。途中で、先住民の攻撃にあたり、先住民に武器弾薬を高額な値段で取引をして暴利を貪る商人——コマンチェロと呼ばれたこともある——との確執もある。クレスタはシャイアンにわたるであろうライフルや弾薬はほうっておけと主張するが、ホーナスは先住民に武器がわたることに反対だから、

馬車ごと燃やすことを主張し、馬車に火を放ち、二人は武器商人から逃れる。二人を追いかけた武器商人はホーナスに銃弾を一発お見舞いする。二人は岩穴に隠れ、クレスタはホーナスの傷を野の薬草で治療をする。

軍隊のブーツを履くためにはソックスが必要だと言い張るホーナス、それに対して裸足で大丈夫だと主張し、川に流れたソックスでシャイアン以外の先住民にも気づかれると主張するクレスタ。女性のクレスタの方が、ホーナスをリードして行く。荒野の逃避行では、自然の中で身につけた困難をもともしない彼女の指導力は、フェミズムの観点からも評価できる。そういう中で、いつしか二人の間には、彼女の言葉をかりれば、「本気の愛」が芽生える。何とか怪我も治り、騎兵隊駐屯地にたどり着く。そこで手に入れた情報が、サンドクリークに築かれたシャイアンの村を総攻撃するというものだった。このサンドクリークでの先住民虐殺という史的事実を『ソルジャー・ブルー』が掘り起こした。

この「討伐」に向かう時に、「連中には教養もなく、強姦、拷問を繰り返す」野蛮人だからと司令官は「討伐」の意義を演説する。

シャイアン族の村に到着すると、部族長の「まだら狼」は、問題を平和的に解決しようと、ライフルに合衆国の旗をつけて近づいてくる。その行為は、「闘いはしない」ことを意味している。そのことを隊員が言っても、隊長はそれを無視して、21名の隊員が殺されたことに対して「教訓を与えてやる」と譲らず、「慈悲無用」と宣言して、砲撃をして、総攻撃を命じる。シャイアンの村には、兵士の姿は少なく、女や子ども、そして老人たちしかいなかった。一方、村に侵入した騎兵隊員たちは獣と化していく。女は強姦され、子どもも容赦なく射殺されたり、斬殺されていく。さらに、先住民の死体から頭皮を剥ぎ、サーベルにつけて走り回る騎兵隊員。先住民の女性のものと思える、付け根から切り取られた脚を空に掲げて、ティピと呼ばれる先住民のテントの周りを狂喜乱舞する兵隊たち。その行動はまさしく蛮行そのものだ。村への砲撃に大砲の前で、「あの村には白人の女がいるから砲撃中止しろ」と必死でホーナスは訴える。だが、それも空しい抵抗で、砲撃は続く。シャイアン族はほとんど壊滅状態になる。ホーナスも恐らく反逆罪だとして拘束され、騎兵隊の馬車につながれ、歩かされている。その時、クレスタと再会できて、二人は微笑みながら、荒野を進んで行く。

人物名称は異なっているが、映画は史実を忠実に描いている。史実の方が、映画よりもさらに残酷だ。アルフォンソ・ピンクニー著 大島良行訳『アメリカ暴力史』（早川書房、1982年）によればこうだ。

シャイアンの大酋長で、和平交渉の代表者であるブラック・ケトルがアメリカ国旗を掲げたが、それをめがけて大砲と小銃が撃ちこまれた。インディアン側には武器が少なく、すぐに圧倒された。婦人子どもは助命を嘆願したが、コロラドの民兵は彼らを至近距離から撃って殺した。一人の妊婦は腹を裂かれ、その子宮から胎児が引き出された。七〇歳になる酋長のホホワイト・アンティローブは殺され、ある兵士はその生殖器を切りとって、それでタバコ

入れをつくるといった。母親たちは乳児を抱いたまま殺された。

九人が捕虜にされた——男二人、女三人、子ども四人だった。彼らは、何十人ものインディアンの頭皮とともにデンヴァーへ送られ、劇場に展示されたが、その劇場ではチヴィントンとその殺人部隊が、怯えている捕虜たちと犠牲者の頭皮を見せながら、彼ら流の武勇伝を語った。観衆はその行為を是認して歓声をあげた。(140)

その後、この虐殺事件は軍法会議でとりあげられたが、その会議を避けるためにチヴィングストンは退役していた。また、映画のホーナスのように、大砲の発砲を阻止しようとした将校は、砲撃攻撃の命令を拒否して、部下に伝達しなかったとの証言をしたが、結局、開拓民たちの暴行を受け殺害される。史実はアメリカ合州国の暴力体質をいっそう鮮明に示している。

イラク攻撃の理由としてブッシュ大統領が挙げた細菌兵器の問題も、アメリカ先住民史を読めば、そうした細菌兵器のことをだいたい前に考え出していたのは白人側であることがわかる。J. コスター著 清水知久訳『この大地、わが大地』（三一書房、1976年）には、「一七六〇年代にはポンティアクと戦ったイギリスの将軍ジェフレー・アマースト卿が、天然痘菌の付いた毛布を敵のインディアンに送ること、＜その他このいまましい人種を根絶できるあらゆる手段を用いること＞を命じた事実もある」(82)。この作戦が実行されたかどうかは不明だが、「ポンティアクの戦士たちの間に伝染病が流行したのも事実である」(83)と断定はさけながらも、その可能性をピンクニーの書は示唆している。

サンドクリークでの虐殺を指揮したシヴィントン大佐は1880年代にもその行為を正当化する演説をおこなっているが、その後もインディアン討伐作戦は続く。「英雄」としてその名を馳せたジョージ・アームストロング・カスターの率いる第七騎兵隊がシャイアン族との闘いで全滅するのがリトル・ビッグホーンの闘いだ。この出来事を背景にした映画が、『小さな巨人』だ。

『小さな巨人』とは

Thomas Berger, *Little Big Man* (1964) も1970年に映画化された。角川書店から佐波誠訳『小さな巨人』も刊行されている。「わたしの名前はジャック・クラブ。正真正銘の白人であり、それは百十一歳になるこんにちまでかたときたりといえども忘れたことはない、十歳の時、ひょうんなことからシャイアン・インディアンの手でそだてられるはめになってしまったのである」(3)という書き出しで、大枠はわかる。つまり、白人の世界、主に騎兵隊の世界とシャイアン族の世界を行ったり来たりして、リトル・ビッグホーンの闘いをクラブは経験することになる。主演のダスティン・ホフマンが特殊メイクで老齡のクラブを演じている。監督は、ニューシネマ運動を推進したアーサー・ペン。

前述したサンド・クリークが起こった後、オクラホマのワシタ河の川辺に定住し始めたシャイアン族の壊滅にカスター將軍とその第七騎兵隊だぐ乗り出す。そして、彼とその部隊が全滅をす

るまでを映画は追っていく。この映画はウーンデッド・ニーのシャイア族壊滅と理解されているようだが、映画にも示されているが、カスターが殺害されるのは 1890 年のウーンデッド・ニーの闘いではなく、その 2 年前のリトル・ビッグホーンの闘いであり、シャイアン族とその連合にとっては、つかぬまの勝利の時だった。

教会を持たない、モルモン教の牧師であった父が先住民に対する布教活動のために 1852 年、ララミーに向かう。クラブが 10 歳の時だ。ララミー山塊のふもとの酒場を仮の教会にして、先住民を集めてミサを開こうと企画した。その時、たまたまシャイアン族もやって来た。ウイスキーをふるまったことから、大混乱し、先住民同士に喧嘩が始まり、父も含めて同行した白人達は殺害されてしまう。翌日、前日の混乱について、友好の気持ちと死んだ男達の命の償うためにと、八頭の馬を持ってやって来たのが、シャイアンたちだった。そして、姉のキャロラインともども部族の村にクラブは連れて行かれる。ティピの中で、シャイアン族の老婆たちが、キャロラインの胸を触り、残念そうな顔をする場面がある。男まじりのキャロラインを男と勘違いしたわけだ。彼女はすぐに村から脱出する。取り残されたジャック・クラブは、シャイアンの子どもたちと自然の中で成長して行く。

もっとも、ジャックは背丈が低いことからかわれたりする。そして、喧嘩をした時に拳で殴るということをして相手を出血させてしまう。この時にジャックは当然、誤るのだが、この誤ることが仲間に恥をかかせたことを知る。また、別の部族、クロー族の大集団が野営しているところから、馬を盗み出すことが計画され、若者たちに任務が与えられる。ジャックは戦闘にはなれていない、まだひよっこだからと馬の面倒をみる役割にさせられる。この馬番をしている時に、クロー族の戦士に襲われる。そのクローの兵士が、ジャックの顔に塗った塗料が汗ではがれて、白い肌であることに気づく。とたんに、クローの方は「白人にはおべっかをつかっていたから」、ジャックが白人だと知ると、態度を急変させて殺そうとはせず、自分たちのティピに連れて行こうとする。だが、このクロー族にかかわりあうことは一緒にやって来た仲間の身の危険につながると判断し、ジャックはこの戦士に弓を放つ。

人を殺すという初めての体験は、ジャックを失神させることになるが、一人で仲間の命を守ったとジャックの養父となる酋長オールド・ロッジ・スキンに認められ、インディアンネームを与えられる。「この子はヒューマン・ピーイングであることを証明した。……彼（ジャックのこと——筆者）はヒューマン・ピーイングだ！偉大なるリトル・マンが彼の頭のなかにしのびこんだとき、彼はクローを殺す力をさづけられた、そして、いままたあるきだしたのだ！」(25)と語る。そして、「この子はからだこそちいさいが、すでに男になった。しかも、心は大きい！したがって、これより彼をリトル・ビッグ・マンと命名するこのにする！」(同)。ちなみに、＜シャイアン＞といことばは、「真の人間」を意味している。アイヌということばが、「真の人間」を意味していることも共通している。

リトル・ビッグマンはその後、たびたび戦闘に出かけて行く。そして、1857 年の白人との戦闘で捕虜になるが、ジャックが白人であると告白し、難をのがれて、白人の従軍牧師で、ふっと

ちょのベンクレークが養父となる。ベンクレーク夫人も何かにつけて聖書の言葉を引用し、また、読み書きも教えてくれて、ジャックを「文明人」に戻そうとしてくれる。ところが、「汝姦淫をするなかれ」という聖書の言葉とは裏腹に、街のドラッグストアの主人と不倫している。夫人の度重なる浮気に嫌気がさし、ジャックは牧師の家を離れ1859年の8月にシャイアン族に遭遇する。そして、寸での所でまた再びシャイアン族に戻る。だが再び、村をはなれてジャックはデンバーに向かう。ここで、スウェーデン人のオルガに人目ぼれをし、結婚をし、大物実業家、そして将来は政治家になる決意をかためる。だが、雑貨屋を経営し始め、順調にすべりだしたはずの商売も、共同経営者たちの詐欺にかかり、動産、不動産とも他人にわたり、着の身着のまま駅馬車でプエブロに向かう。途中、上述のサンドクリーク虐殺を行なったチビングストン大佐に出会ったりしながら駅馬車に揺られて行く。途中、シャイアン族に襲撃され、オルガも息子も拉致されてしまう。1865年夏にオマハにたどり着いたジャックは、世の中に嫌気がさして、アル中のホームレス生活を送る。そんな生活を送っているときに、御者から蔑まされ、暴行を受けているところを救い出してくれるのが、姉キャロラインだった。映画の中では、キャロラインがジャックにはガンマン生活が送れる様にと銃の撃ち方を教えてくれるのだが、原作では有名なガンマンのワイルド・ビルが教える。

ワシタ河でのシャイアン襲撃の時、ジャックはカスターに出会う。シャイアンの酋長ブラック・ケトルの亡骸を目にする。カスターはシャイアンのポニーも「逃げ遅れた犬たちまでも殺した」と言う。この時、シャイアンに捕虜になった風を装い、死体の軍服に着替えてカスターに何とか近づこうとする。カスター殺害を決意して、リトル・ビッグマンは深夜にカスターのもとに熱いコーヒーを届ける。だが、カスターの気迫に押されて、殺害できない。自己の不甲斐無さを感じて、荒野を歩き、クリーク族のもとに世話になる。やがて、カンザスへと向かい、そこで、ワイルド・ビルと再会し、ガンマン修行をする。その後、ジャックはカスターがリトル・ビッグホーンにいることを付きとめ、自ら斥候を申し出る。カスターの作戦情報をつかみ、シャイアンを助けようと考えたからだ。しかし、カスターは斥候はいらぬと言うが、御者としてならと言って、雇ってもらうことになる。やがて、ジャックの率直な物言いが気に入られて、斥候に任命される。クロー族の斥候がシャイアンの大野営地を発見したので、翌日にカスターは奇襲攻撃を意図する。しかし、爆竹箱を探しにもどった兵士が逃亡した先住民を発見したこともあり、反対の声を無視して、即日、攻撃を行なうようにと命じる。シャイアンをはじめとする先住民の戦士部隊はカスターの兵隊よりも数のうえで圧倒していた。

映画では、この戦闘シーンをかなりリアルに映し出している。カスターの命令が混乱するなかで、自ら「脳性梅毒の症状がでてきている」と語ったり、大統領就任演説を始めたりしてしまう。実際カスターは、この闘いで勝利を収め、大統領に立候補する気でいたようだ。

また、『この大地、わが大地』によれば、カスターは「長い紅毛にちなんで、かれを『ロング・ヘア』と呼ぶようになった。別の仇名は『女殺し』、『子供殺し』だった」(92)。また、「男気があり、見栄ばりで、派手好みだった。ときに感傷に溺れ、容赦のないところもあり、無責任で

もあった」(同)と述べられている。映画では、赤毛がブロンドになっており、常に自慢の髭の手入れに余念がない。派手な山高帽子を被って、先頭に立って指揮をする。たしかに見栄っ張りだ。「無教養で、残忍な野蛮人に教訓を与えてやる」と攻撃演説をして、先住民の子どもを見ると、「目障りだ」と拳銃を向ける。カスターの英雄像が浅薄で、無内容なものだと画面を通して理解できる。

こういう「英雄」カスターに対して、「天にまします精神」に祈る。『小さな巨人』の中のオールド・ロッジ・スキンのことばはこうだ。

わたしは多くの戦士を殺し、たくさんの女を愛し、めぐみものを腹いっぱい馳走にもなりました。むろん、飢えもあじわいました。いま、それらのすべてに礼をいうと同時に、そのような食料をあたえたまえしあなたの慈愛に感謝をささげます。……〈後略〉……」(290)

「わたしをヒューマン・ピーニングにしたもうたあなたに感謝します！ わたしを勇者とならしめてくれたあなたに感謝します！ わたしに敗戦と勝利をあじあわせてくれたあなたに感謝します！ わたしに目をあたえて、さらに、将来がみえるようにしたもうたあなたに感謝します！ 〈後略〉」(291)

当然のことながら、「天にまします精神」は、原書では“the Everywhere Spirit”となっている。アメリカ先住民にとっては〈神〉は一神教ではなく、彼ら、彼女らをとりまく大地と自然、そして命をもつ生きものが敬うべき存在となる。

キリスト教の“God”を信じない、また、26文字のアルファベットをもたないから野蛮だととらえて、それらを押しつける態度に〈傲慢さ〉があらわれてくる。

そして、このリトル・ビッグホーンでの先住民の勝利とカスター將軍率いる第七騎兵隊の全滅から3年後、サウス・ダコタのウンデッド・ニーでのスー族に対する大虐殺が起きる。その年、1890年に「フロンティア消滅宣言」をアメリカ国勢調査局は発表した。それ以後、アメリカ先住民との衝突がなくなった。同時に、「ドース法」が制定されアメリカ先住民に土地が分配されることになったが、私有財産制に同化できず、手に入れた土地も手放さざるをえなくなる。さらに、学校教育を通して同化政策が行なわれ、清水知久の『米国先住民の歴史』(明石書房、1986年)によれば、「いったん同化にイエスと答えれば、髪の高さや形にも自由はなかった。長髪はきられた。〈文明化〉への第一歩というわけである。生活の習慣、信仰その他、インディアンらしさはすべて野蛮の名で否定されるのがふつうだった。白人たちがとくに力を注いだのはインディアンの信仰をもぎとり、キリスト教化することだった」(109～110)。

21世紀になり、さまざまに発達した科学技術を応用して最新兵器を開発したところで、それを用いる者たちの発想は旧態依然としている。まさしく、歴史から何も学びとっていない姿がイラク戦争を遂行した人たちにはあらわれている。上述したアメリカ先住民に対する抑圧の歴史を含めて、なぜアメリカ合衆国が暴力的体質を持っているのかを考えてみよう。

アメリカ合州国の暴力的体質の根源

この問題に本質的に切り込んでいるのは、ピンクニーだろう。前掲の『アメリカ暴力史』の中で、その根源はカルヴィニズムにあると指摘する。

この思想は「神による選別と世俗的な富を宿命として同一視する教義を是認している。この宿命論の政治的な重要性は、指導する側と従う側が神の意志によって定められており、人々を集団ごとに救われる側と呪われる側のいずれかに分けるように、つとめて信者に考えさせたことである。この教義は人種によって優劣が決まっているという考えと結びついて、黒人の奴隷化とインディアン根絶を正当化した。カルヴィン主義はまた、勤勉に世俗的な富を求める人々には神が特別の祝福をあたえるものと信じていた。事実、R.H. トーニーによると、「資本主義はカルヴィン神学の社会版であった」。利益は善なる行為の証拠とみなされたのである。(21)

と述べている。さらに、「社会ダーウィニズムが黒人奴隷制とインディアン根絶をも正当化した」(22)と分析する。そして、マスメディア、とくにテレビが暴力を大量に提供し、銃規制には「全米ライフル協会やその他の団体の圧力によって失敗に終わっている」(同)と指摘する。また「超愛国者たちは必ずデモ参加者に暴力行為をおこなう」し、アメリカ社会には、「論理的な批判や社会変革を求める要求に耳を貸さない特徴があり」、正当な不満に対しても「暴力的な手段でむりにおさえつけ、不満を封じている」(同)と手厳しく批判する。

暴力番組ばかりではなく、アメリカ合州国政府の公報、そしてテレビニュースや新聞記事、さらには、いわゆる知識人に対しても厳しい批判の目をむけているのが、ベトナム戦争反対の論陣をはった、言語学者のノーム・チョムスキーだ。チョムスキーは、『メディア・コントロール——正義なき民主主義と国際社会』(集英社新書、2003)の中の辺見庸からのインタビューでも、「イギリスとアメリカがフセインの圧制を支援してきたことは知識人ならだれでも知っているし、いま、彼を悪の手先のように非難するのが極めて偽善的であるのもわかりきっているのに、誰ひとりそうは言わないのです。なぜならば、知識人は権力に従わなければならないと知っているから——真実を口にしてはいけなさと知っているからです。権力には迎合して、指導者を称えなければならないとね。……」(139)と手厳しい。

また、『オリエンタリズム』を書いた故E.W.サイードも『裏ざられた民主主義——戦争とプロパガンダ4——』中で、こう指摘する。

アメリカにおける議論の本質は、黒か白か、善か悪か、われわれの側か奴等の側かをふりわけることだ。このような善悪二元論が、不動の思想的次元として永遠にくみ込まれている

ように思われ、それを変えようとすれば一生をかけた大仕事になる。たいていのヨーロッパ人にとっても、それは同じだ。…… (中略) ……それゆえになおさらトニー・ブレアが本気で親アメリカ姿勢をとっていることは、わたしのような部外者にとっては不可解なことだ。ほっとさせてくれるのは、イギリス国民にとってもブレアはユーモアのない例外的存在だということだ——ヨーロッパ人でありながら自分のアイデンティティを抹消して、嘆かわしいブッシュに代表されるような別のアイデンティティを獲得した逸脱者なのだ。ヨーロッパがいつ正気を取り戻し、アメリカに対する抵抗勢力としての役割を引受けるようになるのか、それをみとどける時間はわたしには残されている。…… (8)

新しい思想と行動

イラク攻撃を多くの国民が「支持」して行く中で、「たった 1 人の反対」の声をあげたアフリカ系アメリカ人女性バーバラ・リー下院議員。アメリカ軍人の家庭が多いメイン州の中で、「イラクの子どもや母親の苦悩を考えてみよう」という内容のスピーチを行なった女子中学生もあらわれた。地元では支持を十分に得られなかったにしても、彼女のスピーチがインターネットで世界中に配信されて、その主張が国際的に支持を得ている。その中学生シャルロットは、自分の主張と活動を訴えに母親と来日した。また、9.11 の事件の後、ニューヨークで音楽活動をしている坂本龍一がいち早く、報復攻撃には反対を唱え、『非戦』(幻冬社、2001 年) という本を出版し、戦争の無意味さを伝えようとした。さらに、9.11 事件の被害者遺族が中心になり、武力ではなく、話し合いで戦争を回避し、平和な社会を目指そうとするアメリカ市民の平和運動、“Peaceful Tomorrows” の取り組みもはじまっている。この活動については、7 月に NHK テレビが紹介、特集番組を放映した。

上述したような個々の活動も大切にしながら、サイードの先の著書に述べられた「途方もなく重要で根本的なアメリカの体験、すなわちアフリカ系アメリカ人を奴隷にしたこととアメリカ先住民を追放し、ほぼ全滅させたことに対する、慣習化したとさえ言える無責任である。これらのことは、いまだにナショナル・コンセンサスのなかに、少しでも重みをもってもりこまれたことはない」(81) ということばと、「ブッシュやシャロンがこの世界の白人以外の人々に軽蔑の念をいだいていることは明らかだ」(54) という警告も心に銘記しておきたい。アメリカ合州国の教育と研究は直接、間接に日本にも影響をおよぼす。サイードやチョムスキーの鋭く物事を批判的にとらえる目をわたしたちも曇らせてはならない。

引用/参考文献

アルフォン・ピンクニー，大島良行訳（早川書房，1972年）.

Beger Thomas. *Little Big Man* (New York: Fawcett World Library, 1964.) なお引用は、佐和誠 ^{『小}
 さな巨人』(角川書店, 1971 年)を使用した。

エドワード・W・サイト，中野真紀子訳『裏切られた民主主義——戦争とプロパガンダ4——』（みすず書房，2003年）。

大島良行編著『アメリカ・ウェスタン辞典』（研究社出版，1981年）。

坂本龍一監修『非戦』（幻冬社、2002年）。

ジョン・コスター、清水知久訳『この大地、わが大地——アメリカ・インディアン抵抗史』（三一書房、1977年）。

ノーム・チョムスキー、鈴木主税訳『メディア・コントロール——正義なき民主主義と国際社会』（集英社新書、2003年）。

清水知久『米国先住民の歴史——インディアンと呼ばれた人びとの苦難・抵抗・希望』（明石書店、1986年）.

なお、本文中の（ ）内の算用数字は上掲書からの、引用ページを表わす。また、アメリカ合衆国の表記も合州国とした。

映像資料

ラルフ・ネルソン監督『ソルジャー・ブルー』（エンバシホーム エンターテイメント，1984年）。

アーサー・ペン監督『小さな巨人』（フォックスビデオ ジャパン, 1993年）.

